

総合的な探究の時間に関する研究〔中間報告〕

吉田 早織¹ 栗田 泉²

『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説総合的な探究の時間編』では、「総合的な探究の時間」を教育課程の中核に位置付け、学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントの重要性が示された。2年間の研究の1年目は、カリキュラム・マネジメントを充実させるため、調査研究協力校の「総合的な探究の時間」における探究のプロセスや校内体制づくりに関する取組を調査・分析し、成果と課題を探った。

はじめに

現在の子どもたちが成人し、社会で活躍する頃、我が国は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造が大きく且つ急速に変化し、予測困難な時代になると言われている。

このような社会を生きる力を育成するために、平成30年3月に告示された、高等学校学習指導要領において、学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成していくことができるよう、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることが示された。

また、それらの資質・能力を育成するために、『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説総合的な探究の時間編』(以下、解説という)では、「総合的な学習の時間」から名称変更された「総合的な探究の時間を教育課程の中核に位置付けるとともに、各教科・科目等との関わりを意識しながら、学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントを行うこと」(文部科学省 2018 p.76)とされ、「総合的な探究の時間」の重要性が示された。

令和元年度から年次進行で先行実施された「総合的な探究の時間」に対応するため、神奈川県教育委員会(以下、県教委という)は、「県立高校改革実施計画(Ⅱ期)」(以下、指定校事業という)において、「『総合的な探究の時間』に係る研究」に取り組む研究開発校(以下、指定校という)を10校指定し、研究開発の支援を行っている。

総合教育センターは、令和元年度、令和2年度の2年間、指定校のうち舞岡高等学校、藤沢西高等学校の2校を調査研究協力校(以下、協力校という)とし、「総合的な探究の時間」に関する研究を行うこととした。また、令和元年度の1年間、藤沢西高等学校の教職員1名が、総合教育センターの長期研究員として、本研

究と連携を図りながら「総合的な探究の時間」に関する研究を行った。

研究の目的

「総合的な探究の時間」について、協力校の実践に基づき、よりよい取組の在り方を探り、発信することにより、各高等学校の取組の充実に資する。

研究の内容

1 研究の背景

(1) 「総合的な学習の時間」について

平成8年の中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)」において、子どもたちに全人的な力である「生きる力」を育ていくために、「横断的・総合的な指導を一層推進し得るような新たな手だてを講じて、豊かに学習活動を展開していくことが極めて有効」とされ、「総合的な学習の時間」の創設が提言された(中央教育審議会1996)。これを受け、平成10年から平成11年にかけて、学習指導要領が全面改訂された。その後も、平成15年の一部改訂、平成21年の全面改訂を経て、「総合的な学習の時間」の充実が図られてきた。

(2) 「総合的な探究の時間」について

ア 学習指導要領改訂の趣旨

平成28年12月中央教育審議会「『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』(答申)」(以下、平成28年答申という)では、「総合的な学習の時間」の課題として、次の3点が示された。

- ①総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが十分に行われていない
- ②探究のプロセスの中でも「整理・分析」「まとめ・表現」の取組、探究のプロセスを通じた一人一人

1 教育課題研究課 指導担当主事

2 教育課題研究課 指導主事

の資質・能力の向上が十分に意識されていない
 ③小・中学校の取組の成果の上に高等学校にふさわしい実践が十分に展開されていない

(中央教育審議会 2016を基に作成)

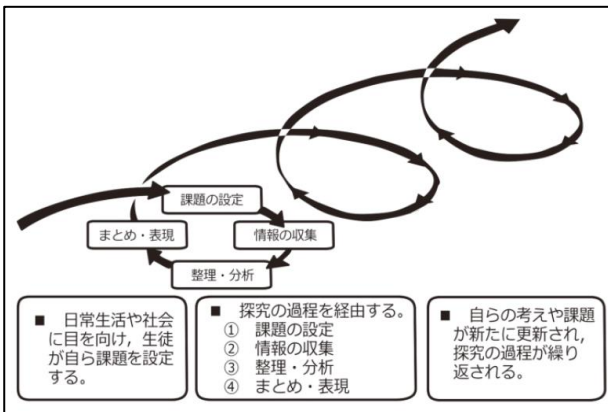
イ 学習指導要領改訂の要点

平成 28 年答申を受け、新学習指導要領では、「総合的な学習の時間」の名称が「総合的な探究の時間」に変更された。

また、解説において小・中学校における「総合的な学習の時間」の取組を基盤とした上で、各教科・科目の特質に応じた「見方・考え方」を総合的・統一的に働かせること、自己の在り方生き方に照らし、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら「見方・考え方」を組み合わせて統合させ、働かせながら、自ら問いを見いだし探究する力を育成することが示された。そして、「総合的な探究の時間」のねらいや育成を目指す資質・能力を明確にすること、「総合的な探究の時間」が教科・科目等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸となるよう、各学校が「総合的な探究の時間」の目標を設定する際に、各学校における教育目標を踏まえて設定することや学校で設定した「総合的な探究の時間」の目標を実現するにふさわしい探究課題を設定することが示された(文部科学省 2018 p. 7)。

ウ 探究の定義

解説において、「総合的な探究の時間における学習では、問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく」ことを探究と呼び、「要するに探究とは、物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営みのことである。」(文部科学省 2018 p. 12)としている。また、探究において、生徒は、探究の過程①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現)を発展的に繰り返していく(第 1 図)。このことを探究のプロセスという。



第 1 図 探究における生徒の学習の姿(文部科学省 2018 p. 12を基に作成)

この探究のプロセスを支えるのが「探究の見方・考え方」である。実社会・実生活における課題は、様々な教科・科目等の特質に応じた「見方・考え方」を総合的・統一的に活用することが求められるからである。

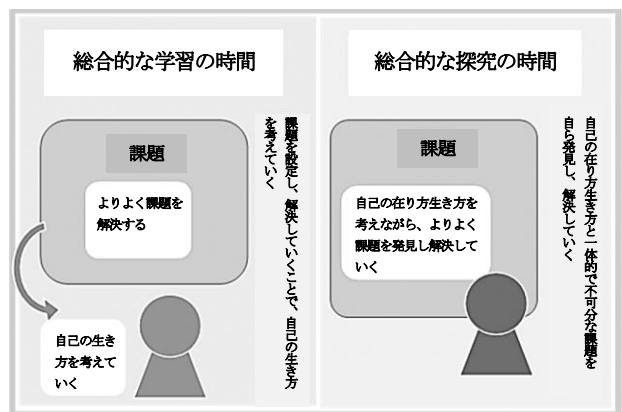
【「探究の見方・考え方」】

各教科・科目等における見方・考え方を総合的・統一的に活用して、広範で複雑な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の在り方生き方を問い続ける

(文部科学省 2018 p. 13を基に作成)

エ 「総合的な探究の時間」の特質

解説では、小・中学校の「『総合的な学習の時間』は、課題を解決することで自己の生き方を考えていく学びであるのに対して、『総合的な探究の時間』は、自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく」(第 2 図)とされた(文部科学省 2018 p. 8※『』は、筆者)。



第 2 図 課題と生徒の関係(イメージ)(文部科学省 2018 p. 9を基に作成)

自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し、解決していくことのできる生徒の姿を実現していくに当たっては、「生徒が取り組む探究がより洗練された質の高いものであることが求められる。」(以下、質の高い探究という)(文部科学省 2018 p. 9)とされた。解説においては、質の高い探究について、次のように示している。

【探究の過程が高度化する】

- ① 目的と解決の方法に矛盾がない(整合性)
- ② 適切に資質・能力を活用している(効果性)
- ③ 焦点化し深く掘り下げて探究している(鋭角性)
- ④ 幅広い可能性を視野に入れながら探究している(広角性)

【探究が自律的に行われる】

- ① 自分にとって関わりが深い課題になる(自己課題)
- ② 探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる(運用)
- ③ 得られた知見を生かして社会に参画しようとする(社会参画)

(文部科学省 2018 p. 9を基に作成)

高等学校では、このような生徒の姿を目指し、教育活動を展開していくことが求められている。

(3) 県教委の取組

県教委は、指定校事業の柱の一つ、「質の高い教育の充実」を目的とし、指定校を10校指定して、指定校間の情報共有、指導主事の派遣、研究成果の普及など様々な支援を行っている。指定校事業における指定校の研究内容等の一部は次のとおりである(第1表)。

第1表 指定校の研究内容等

指定期間	平成31年4月から令和4年3月までの3年間
指定校	<p>【全般的な研究】 市ヶ尾高等学校、横浜清陵高等学校、藤沢西高等学校、秦野総合高等学校、大和高等学校</p> <p>【SDGsをテーマとした展開に係る研究】 川崎高等学校、舞岡高等学校、横須賀明光高等学校、山北高等学校、有馬高等学校</p>
研究内容	<p>(1) 次のことについて研究することとし、各指定校で研究テーマを設定すること</p> <p>ア 探究のプロセスによる学習過程の在り方についての実践及び検証に関すること</p> <p>イ 「総合的な探究の時間」を充実させるための校内体制づくりについての実践及び検証に関すること</p> <p>ウ 「総合的な探究の時間」を中核としたカリキュラム・マネジメントの在り方についての実践及び検証に関すること</p> <p>(2) 学校全体として組織的に研究に取り組むための体制を整えること</p> <p>(3) 高校教育課主催の「探究活動に係る指導力向上研修」へ各校1名以上参加し、研修成果を校内で共有すること</p>

2 研究の方法

令和元年度は、指定校の研究内容である、「探究のプロセスによる学習過程の在り方についての実践及び検証に関すること」(以下、探究のプロセスに関する取組という)及び「『総合的な探究の時間』を充実させるための校内体制づくりについての実践及び検証に関すること」(以下、校内体制づくりに関する取組という)の二つの視点から、協力校の授業や校内研修会等の取組の調査、分析を行い、その成果や課題を整理するとともに、カリキュラム・マネジメントにつながる取組を探った。また、教職員対象のアンケート調査(後述)を実施した。

【視点①】探究のプロセスに関する取組
「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」の充実に関すること

各取組について、主にどの探究の過程の充実につながったか示した。

【視点②】校内体制づくりに関する取組
「校内推進体制の整備」、「教職員の研修」及び「外部との連携」の充実に関すること

解説の「総合的な探究の時間を充実させるための体制づくり」から、特に他校の参考になる取組「校内推進体制の整備」、「教職員の研修」及び「外部との連携の構築」について整理した。(文部科学省 2018 pp. 139-153)

3 舞岡高等学校の取組

(1) 舞岡高等学校の研究概要

令和元年度入学生から、各学年に1単位ずつ「総合的な探究の時間」を設け、研究テーマ及び本年度の研究目標を次のとおり設定している。

【研究テーマ】

SDGsの視点を取り入れて、自己や社会を関連付けて課題を発見し、主体的かつ協働的に、解決の方法を見出していく探究の資質・能力を養う教育プログラムの開発

【本年度の研究目標】

主体的かつ、他の生徒や地域と連携し、探究のプロセスを理解、実践し、それを踏まえて課題を深める力を身に付けさせる

第1学年においてコミュニケーション力向上を目指した舞岡チームビルディング、思考ツールを活用し探究のプロセスを学ぶ進路探究、地域の企業等の協力を得たSDGsに関する講演会、地域探究を行った。

第2学年の1学期に、探究のプロセスを理解し、実践できることを目指す「プレ個人探究」を行い、2学期以降は、それまでの成果を基にした「個人探究」を行う予定である。

これらを通して「すべての人が平和と豊かさを享受できる持続可能な社会の建設のための教科横断的・総合的なテーマに対して、自己の在り方生き方を考えながら、主体的・協働的に課題を発見・解決する探究のプロセスを実践し、そのことを通して社会貢献できる資質・能力を養う」ことを目指した取組を進めていく。

(2) 【視点①】探究のプロセスに関する取組

年間の授業等の概要は次のとおりである(第2表)。探究の過程の充実につながった様々な取組の中から、特徴的なものを取り上げる。

第2表 年間の授業等の概要

	○ 内容 「ねらい」
4月	<p>○ オリエンテーション 「探究的学習とは何か理解する」</p> <p>○ 舞岡チームビルディング 「集団でのアクティビティを通して、協働して目標を達成することの良さを知る」等</p>

5月～9月	ア 進路探究(個人探究・グループ探究) 「進路を探究テーマにして、自己の在り方生き方を考え、自分の課題を考える力を身に付ける」
9月～2月	イ 地域探究 「地域で活動する人々の話を聞くことなどを通じて、グループで協力しながら課題の発見の仕方を学ぶ」
1月31日	ウ 横浜中地区 探究的学習発表会 「探究的な学びを通して考えたことを、根拠に基づき説明し、質疑応答をとおして学びを深めることで、知的探究心を高め、問題発見・解決能力の育成を図る」

ア 進路探究(「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」)

進路探究は、卒業後の進路について考える探究活動であり、探究の過程に必要な資質・能力を身に付けることを目的として全10時間行った。第1時から第5時は個人、第6時から第10時はグループで課題を設定して探究活動を行った。

第1時から第4時は個人で課題を設定する際に、『進路の手引き』等の資料を読んだり、様々な思考ツールを活用し、自分の進路希望を実現するためにどのような力を養う必要があるかを考えたり、現在の自分となりたい自分のギャップを考えたりした。

第5時には、四人一組のグループで「現時点で考えている自らの進路についての調査内容」の発表を行い、聞き手から、良い点と改善点のフィードバックを受け、再度発表を行った。

第6時から、夏休みに実施する体験活動(オープンキャンパス、仕事の学び場、インターンシップ、夏期講座の何れか)について、グループでブレインストーミングや思考ツールなどを活用しながら、知りたいことを洗い出して整理した。また、文献調査、インタビュー、アンケート等の情報の収集や整理・分析の方法、まとめ・表現(発表)について検討した。さらに、ワークシートを使って発表内容(タイトル、調べたこと、情報の整理・分析、ポイント・主張、視覚化の方法・工夫)を整理した後、模造紙で発表資料を作り、グループ課題の発表準備を行った。そして、プレゼンテーションを成功するためのポイントを確認し、グループ課題のクラス内発表を行った。

クラス内発表は、黒板に模造紙を貼って、5分間の発表、2分間の質疑応答の流れでグループ(5人前後)ごとに行った。生徒たちが進路をテーマに、「職業と大学のつながり」、「大学が求める能力」、「環境と大学の関わり」と言った多様な課題を設定している様子が見られた。

イ 地域探究(「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」)

地域探究は、生徒が、学校周辺の90以上の企業等から訪問先を選び、その訪問先のプレゼンターになることを通して「課題の設定」の能力を育むことを目標にして、全17時間行った。

第1時は、SDG sを知ることを目的として、第1学年の生徒全員を対象とする講演会を大手企業から講師を迎えて実施した。

テーマは「90分で分かる! SDG s 攻略法」とし、フェアトレードの取組やSDG sの考え方を広げていくことの難しさ、自分たちが今できることと将来できるようになりたいことなど、生徒に、世界で起こっている様々な出来事が日本や自分の日常生活にどのような影響を与えているのかを考えさせる内容だった。

第3時は、地域とSDG sのつながり、地域探究のねらいを理解することを目的に、地域講演会及び地域探究オリエンテーションを行った。

地域講演会は、地域の企業から講師を招き、社内でSDG sに関する取組の検討を進める中で、自動販売機のペットボトルを廃止したこと、FSC認証を受けた木材を使っていること、SDG sに取り組む企業理念に共感して同じ理念を持った企業同士のネットワークができていったこと等が紹介され、生徒にとって、世界で起きている様々な出来事を自分自身の問題として捉えるきっかけとなる内容だった。

オリエンテーションでは、教職員が地域探究の目標や学習活動などについての説明を行った。

第6時の公開授業は、質問をブラッシュアップすることを目的とし、訪問先への模擬インタビューをグループ毎にロールプレイ形式で行い、気付いたことをフィードバックした。

各グループのインタビューに対し、これまでの進路探究やSDG s講演会で学んだことをいかし、「仕事のやりがいや誇りに思っていることは何か」など職業観に係る質問や、「SDG sの視点を取り入れた質問をした方が良いのではないかな」などの意見が出された。

第16時の公开发表会は、地域探究のまとめ、クラス単位における探究活動の成果を共有することを目的として、グループごとに5分間の発表、2分間の質疑応答の流れで行った。発表方法は、KP(紙芝居プレゼンテーション)法、内容は、訪問先の概要、訪問先での体験やインタビュー、訪問して学んだことや新たな問いで構成されていた。

生徒からは、「SDG sについて、どうすれば多くの人に知ってもらえるか」、「外国人が日本社会になじむために何をすればよいか」などの趣旨の問いが発せられた。「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を発見し、解決していく」様子も見られた。

参観者からは、「KP法は、要点をまとめる力を付けられる」、「要点がまとまっていて分かりやすい」、「全体を俯瞰できる」などの意見が出された。

ウ 横浜中地区 探究的学習発表会(「課題の設定」、
「まとめ・表現」)

探究的学習発表会は、県教委が主催する各学校の生徒による探究的学習の発表会である。「探究的な学びを通して考えたことを、根拠に基づき説明し、質疑応答をとおして学びを深めることで、知的探究心を高め、問題発見・解決能力の育成を図る」ことを目的としている。本年度は、10地区に分かれ、地区ごとに指定校やSSH校(スーパー・サイエンス・ハイスクール)等の生徒が参加して実施された。

横浜中地区の発表会は、SSH校の発表会(会場校第2学年の全員がグループ発表)と同時開催で行われたため、90本以上の発表が30分×3タームで実施された。舞岡高等学校の第1学年からは、代表の2グループがKP法で発表した。

企業の製品開発について探究したグループは、製品開発のコンセプト、大事にしていること、実現までに長い時間がかかることなどについて発表した。また、動物保護施設を訪問した生徒たちは、動物のために働く人の姿勢や、保護施設にいる動物たちの現状について発表した。次に、質疑応答のやり取りを示す。

【質疑応答における生徒の主な発言の趣旨】

Q企業訪問で気付いたことは何か(教職員等からの質問)

○商品を開発する上で、身の回りのことについて、疑問を持つことが大切だということ。

○SDGsの取組の一環として行っている清掃活動で、地域の企業が繋がっていた。SDGsは身近な問題だと実感した。

○訪問した会社の方は、物事に興味を持って調べる人が多かった。

Q「総合的な探究の時間」で学んだことは何か(教職員等からの質問)

○SDGsの取組があること、その内容を詳しく知った。世界、日本全体の取組を知らなかった。自分が世界とつながっていることがよく分かった。

Q今後にかきたいことは(教職員等からの質問)

○疑問を持つということを大事にしていきたい。

発表会終了後、他の学校の発表を見て気付いたことや感じたことについて生徒たちに質問したところ、「すごい発想の発表をしている人がいて、参考になった」、「沢山の発表を見て、刺激を受けた。来年にかきたい」等の回答があった。

(3) 【視点②】校内体制づくりに関する取組

舞岡高等学校は、「総合的な探究の時間」で使用する学校独自のテキスト(以下、生徒用テキストという)を作成している。また、公開研究授業に併せて、「総合的な探究の時間」に関する研究協議、教育講演会を実施し、全教職員で情報を共有した。さらに、地域の企業等の協力を得て、地域の企業から講師を迎えたS

DGs講演会、生徒が訪問した企業等の方との意見交換会など様々な外部資源と連携し、「総合的な探究の時間」の充実を図った。

ア 生徒用テキストの活用

「授業について、教職員間の情報の共有を図る」

イ 公開授業及び研究協議・教育講演会

「『総合的な探究の時間』訪問先への質問に関する発表、質疑」・「地域探究の意味について理解を深める」

ウ 公開発表会・意見交換会

「『地域探究』を通して考えたこと、感じたことを言葉にする力を付ける」

「地域の企業等の参観者と意見交換を行い、『総合的な探究の時間』の充実を図る」

ア 生徒用テキストの活用(「校内推進体制の整備」)

生徒用テキストには、ルーブリック評価表、育成を目指す資質・能力、学習計画、探究的な学習、探究活動に必要なスキルの解説、思考ツールとその活用方法や授業で使うワークシートなどがまとめられており、年度当初に配付することで、授業の目標や全体像をいつでも確認できるように工夫されている。

このテキストは、生徒にとっては学習の見通しを持つための手引きとなり、教職員にとっても「総合的な探究の時間」で育成を目指す資質・能力について学校全体として共有する指針として、カリキュラム・マネジメントの充実につなげることができる。また、思考ツールやその活用方法等を、各教科等の指導の場面で役立てる資料としても活用することができる。

イ 公開授業及び研究協議・教育講演会(「校内推進体制の整備」・「教職員の研修」)

公開授業の後、舞岡高等学校の全教職員、他校の教職員等が参加して研究協議・教育講演会を行った。教育講演会は、外部講師を招き、課題とは何か、なぜ探究か、といったことについて、ワークショップ形式で実施された。

公開授業及び研究協議・教育講演会

1 公開授業

【実施日】 令和元年11月6日(水)

【教科等】 「総合的な探究の時間」

【授業内容】 訪問先への質問に関する発表、質疑

【対象】 第1学年

2 研究協議・教育講演会

【内容】 地域探究の意味について理解を深める

「炭酸飲料を各教科等のフィルターを通して考えるとどうなるのか」といった各教科等の見方・考え方を総合的・統一的に働かせることにつながる視点や、「美容師に興味がある生徒は、職業として捉えるのではなく、コミュニケーション、解剖学、起業、経営等の要素から最も興味があることを探究テーマにする」といった考え方が示された。

振り返りでは、「『総合的な探究の時間』でどのような取組をしているのか、イメージが持ててよかった。」「探究について、協議をすることで、理解が深まった。」などの意見が教職員から挙げられたことから、校内推進体制の整備につながる取組であったと言える。

ウ 公開発表会・意見交換会（「校内推進体制の整備」・「外部との連携」）

公開発表会は、40名以上の企業等の方、舞岡高等学校内に設置されている保土ヶ谷養護学校分教室の生徒約20名、舞岡高等学校や他校の教職員、県教委などの教育関係者が、各クラスを会場として行った発表を参観した。その後、意見交換会を実施した。

<p>【意見交換会における主な発言の趣旨】（企業等の方）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○SDGsと上手くつながって発表しているグループもあった。 ○半日の体験を5分にまとめて発表するのは難しい。 ○質問をする時間を大事にしたい。質問からこうしたらよいという提案までできると良い。 ○生徒の発表と発表の合間に教職員から企業等の紹介や、発表者への質問があるとなお良い。 ○課題を深掘りすることで、すぐに社会につながる。 ○体験することで視点が広がる。何年も続けてやってほしい。教職員は地域探究、生徒は職業体験と捉えているグループがあったのではないだろうか。生徒、教職員、企業等で地域探究の理念を共有したい。 ○何度か繰り返し企業等に来ることで、探究がもっと良いものになる。
--

参加者から、様々な成果、課題、提案が挙げられた。また、多くの企業等から今後も地域探究に協力していきたいという意見が出された。

4 藤沢西高等学校の取組

(1) 藤沢西高等学校の研究概要

令和元年度入学生から、各学年に1単位ずつ「総合的な探究の時間」を設け、研究テーマ及び本年度の研究目標を次のように設定している。

<p>【研究テーマ】</p> <p>自己実現と社会貢献における「総合的な探究の時間」の研究開発及び検証</p>
<p>【本年度の研究目標】</p> <p>「保育」というテーマから課題を見出し、探究する活動を通して、探究の方法及び探究に必要な諸能力を身に付けるとともに、課題の背景には様々な分野が関わりあっていて、それを考察することが肝要であることに気付かせる</p>

令和元年度は、複数の生徒向け講演会を年度当初に設定し、探究の進め方について理解を深めることを目

指した。また、第1学年の生徒全員が、保育園における半日の保育体験等を通して、探究に必要な諸能力を身に付け、課題の背景を考察することの大切さに気付くことなどを目標として取り組んだ。さらに、「総合的な探究の時間」の研究成果を各教科・科目等にかかすことを目指し、長期研究員と連携を図りながら研究を行った。

第2学年は社会問題の解決に関わる学問・職業について、第3学年は自己の職業選択から捉える社会問題について探究活動を実施する予定である。それらの活動を通して、社会と自己とのつながりを意識させ、主体的に社会に参画する態度を育成することをねらいとしている。

(2) 【視点①】探究のプロセスに関する取組

年間の授業等の概要は次のとおりである(第3表)。探究の過程の充実につながった様々な取組の中から、特徴的なものを取り上げる。

第3表 年間の授業等の概要

	<p>○ 内容 「ねらい」</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 講演会1 情報リテラシー 「情報の扱い方を理解する」 ○ 講演会2 課題発見とマーケティング体験 「探究の流れを理解する」 ○ 講演会3 人前で緊張せずに話す方法 「プレゼンテーションの方法を理解する」 ア 講演会4 保育園の果たす社会的な役割 「子どもを取り巻く社会的な問題等を理解する」
4月 5月 6月	
7月 8月 9月	<p>○ 子どもや保育に関する事前調査 「テーマに関する様々な問題に気づき、グループで解決したい課題を設定する」</p>
9月、 10月	<p>イ 保育体験実施に向けた事前準備(保育に関するDVD鑑賞、活動内容の計画等) 「体験先の情報の収集方法や活動計画の立案方法を理解する」</p>
11月、 12月	<p>○ 保育体験実施、振り返り 「体験を通して学んだことや、新たな課題についてグループごとに振り返る」</p>
11月 12月	<p>ウ 発表準備、クラス内発表 「1年間の探究についてグループごとに発表し、その成果を共有する」</p>
1月 22日	<p>エ 湘南地区 探究的学習発表会 「探究的な学びを通して考えたことを、根拠に基づき説明し、質疑応答をとおして学びを深めることで、知的探究心を高め、問題発見・解決能力の育成を図る」</p>

ア 講演会4（「課題の設定」）

4月～6月にかけて生徒向けの講演会を4回実施し

た。ここでは、特に「課題の設定」に大きく影響した講演会4について、取り上げる。

講演会4は、子どもを取り巻く社会的な問題等を理解させることを通して、「課題の背景には様々な分野が関わりあっており、それを考察することが肝要であることに気付かせる」ことを目的に行った。

まず、講師から子どもを取り巻く環境について、少子化の原因や影響、子どもたちの遊び方などが解説された。続いて、子どもの最善の利益を目指す、養護と教育の一体化を図る、保護者や家庭への支援を行うことなど保育所の役割について説明があった。

この講演会は、生徒がテーマに関する社会問題を知る機会となるとともに、「保育士の減少」、「保育園不足」などを探究テーマに設定するきっかけとなった。イ 保育体験実施に向けた事前準備（「課題の設定」）

保育体験の実施に向け、保育士の仕事のイメージを持つことができるようにすること、働くことの意義や保育体験実施に向けての課題を考えさせることを目的として、DVD鑑賞、協議、振り返りを行った。

1月に実施された探究的学習発表会において、生徒から「事前学習で、保育士の仕事の様々な視点を調べてから保育体験をした。それから保育士の対応を分析した。」という趣旨の発言があったことから、この事前準備が「課題の設定」の充実につながったと言える。

ウ クラス内発表（「課題の設定」、「まとめ・表現」）

探究過程のまとめ、1年間の探究活動の成果の共有を目的に、クラスごとに発表会を実施した。発表は、1年間の成果をまとめた模造紙を黒板に貼り、5分間の発表、2分間の質疑応答の流れでグループ（5人程度）ごとに行った。

当日の発表や、発表を終えて廊下に貼られた模造紙からは、保育という共通のテーマの下、生徒たちが多様な課題を設定している様子が見て取れた。中には、「5歳と15歳の違い」、「園児と高校生と保育士の違い」などの探究テーマを設定し「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を発見し、解決していく」様子も見られた。

また、他者の発表を見ることにより、生徒たちが様々な課題の設定方法があることに気付く機会となった。

エ 湘南地区 探究的学習発表会（「課題の設定」、「まとめ・表現」）

湘南地区の発表会は、藤沢西高等学校（3本）を含む、計8校（13本）が、発表10分間、質疑応答10分間のポスターセッション形式で、「シェイクの値段の違い」、「リーダーシップ」、「ダイエット」、「討論学習」等の様々な探究テーマの発表を行った。

探究テーマを「子供との接し方～子供達から人との関わり方を学ぶ～」と設定したグループは、保育園での保育士と子どもたちのやり取りの観察を基に、子どもたちとどのように接すればよいか発表した。質疑応

答の中で次の様なやり取りが見られた。

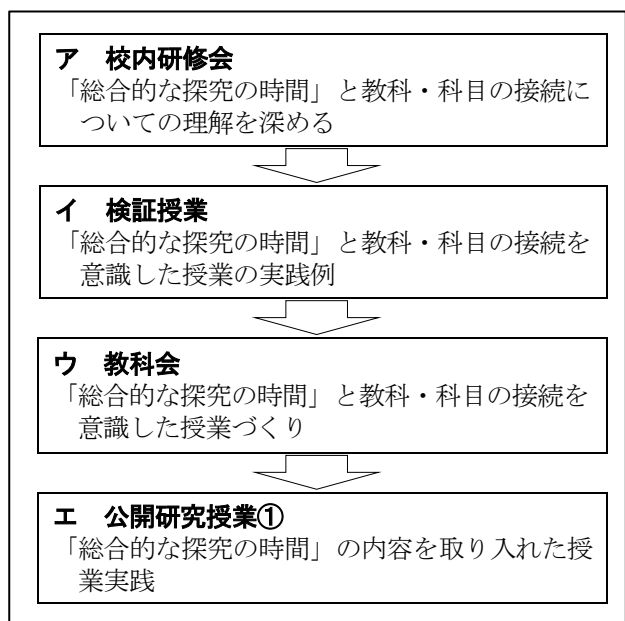
【質疑応答における生徒の主な発言の趣旨】

- Q 「総合的な探究の時間」の成果をどのように役立てたいか(教職員等からの質問)
- 保育士の方は、決められた仕事に加えて、自分で判断して必要な仕事をしていた。私も決められた課題だけでなく、自分から何かをしていきたい。
 - 子どもにすぐに正解を教えなくて考えさせていた。何をすべきか自己判断できるようにしてあげることが大切だと思った。私も自分で考えて判断したい。
 - 指示だけするのではなく、指示と理由を組み合わせるよう説明するようにしていきたい。
 - 叱る前に、共感して気持ちを受け入れてあげるようにしたい。

説明していることの根拠について問い掛けられ、保育士の行動の観察記録を根拠としていることに気付いたり、「子どもと保育士のコミュニケーションについて他の場面でも使えないか」と質問され、自分と後輩の間でも活用できること等に気付いたりするなど、発表者である藤沢西高等学校の生徒が、他校の生徒や教職員等から質問を受け、多くの気付きを得ている場面も見られた。

(3) 【視点②】校内体制づくりに関する取組

教職員が「総合的な探究の時間」と各教科・科目との接続を意識して授業を行うことを目指した校内体制づくりの一環として、次の流れで校内研修会等を実施した(第3図)。



第3図 校内研修会から公開研究授業までの流れ

さらに、1月の「総合的な探究の時間」の生徒発表会を公開研究授業とした。自校の生徒の取組を教職員間で共有し、「総合的な探究の時間」についての1年間の成果と課題について協議した。

オ 公開研究授業②

「総合的な探究の時間」の発表等を全教職員で参観することにより、成果と課題を共有する。

ア 校内研修会(「教職員の研修」)

長期研究員を講師として、校内研修会を実施した。研修前に、教職員対象の質問紙調査を行ったところ、教科・科目の授業と「総合的な探究の時間」との関連を意識することが難しいと考えている教職員が多いことが分かった。そこで、教科・科目の授業と「総合的な探究の時間」の接続について研修を実施した。

校内研修会

【実施日】令和元年8月20日(火)

【ねらい】教科・科目の授業と「総合的な探究の時間」を接続する視点を持つ

【内容】

- ①「探究」についての講義
 - 学習指導要領改訂の趣旨確認
 - 学校が育てたい生徒像とこれからの社会で求められる人材の共通点の確認
- ②グループ討議1
 - 「総合的な探究の時間」と教科・科目の関連が意識されにくい原因について考える
- ③グループ討議2
 - 「探究の見方・考え方」と「各教科等の見方・考え方」を比較し共通点等を見だし、相互の関連性について考える

研修会の結果、各教科・科目の授業と「総合的な探究の時間」には、学習の基盤となる資質・能力の育成という点においてつながりがあることを、多くの教職員が再確認した。そして、各教科・科目で扱う題材は異なっても、資質・能力の育成の過程で働く各教科等の「見方・考え方」が、「総合的な探究の時間」の探究の過程にいかされていることを共有した。一方で、各教科・科目の授業において、探究の見方・考え方を働かせる視点を取り入れた授業の具体がイメージしにくいことが、課題として挙げられた。そのことを踏まえ、長期研究員が検証授業を行うこととした。

イ 検証授業(「教職員の研修」)

授業は、授業のねらいの達成だけではなく、校内研修会の課題を踏まえ、探究の見方・考え方を働かせる視点を取り入れた授業展開を意識して長期研究員が実施した。具体的には、化学基礎の授業において、先人の思考を追体験する中で、探究の過程を視覚化するとともに、実社会や実生活と探究の過程を結び付ける発問を行った。

検証授業

【実施日】令和元年10月3日(木)

【対象】第1学年2クラス

【科目・単元名】化学基礎・化学反応式

【授業のねらい】

- ①基礎法則の発見に至るまでの流れから「探究の過程」を理解する
- ②考え方の枠を変えることで、ものの見え方が変わることを知る

これら、校内研修会や検証授業の取組によって、「教員が『総合的な探究の時間』と教科・科目の授業との具体的な関連を捉えることについて、一定の効果」が得られた(近藤 2020)。

ウ 教科会(「校内推進体制の整備」)

検証授業終了後、校内研修会や検証授業の成果を踏まえ、これまでの実践を「総合的な探究の時間」との関連の視点から振り返り、共通理解を図った。具体的には、健康新聞の制作・発表(保健)、夏季課題ホームプロジェクト(家庭基礎)など、様々な取組が挙げられた。また、公開研究授業でどのような授業をしていくかについて、検討していくことを確認した。

エ 公開研究授業①(「校内推進体制の整備」)

「総合的な探究の時間」の授業を全教職員が実践・参観できる環境を整え、公開研究授業を実施した。

公開研究授業①

【実施日】令和元年11月19日(火)

【テーマ】「総合的な探究の時間」の学習内容を視野に入れた授業

【対象】第1学年

【授業科目等】国語総合、現代社会、数学A、化学基礎、保健、英語表現Ⅰ、家庭基礎、「総合的な探究の時間」

各教科等の特色をいかしながら、物語に描かれている人物像の考察(国語総合)、なぜ、人々は協働すべきなのだろう(現代社会)など、「総合的な探究の時間」の学習内容を視野に入れた授業を行った。

オ 公開研究授業②(「校内推進体制の整備」)

公開研究授業①と同様に実施した。

公開研究授業②

1 公開授業

【実施日】令和2年1月17日(金)

【教科等】「総合的な探究の時間」

【授業内容】保育体験の発表準備
保育体験のクラス内発表

【対象】第1学年

2 研究協議(8分科会)

3 全体会

4 長期研究員による講演会

「本年度の研究成果について」

クラスによって、保育体験の実施時期が異なるため、保育体験の発表準備、保育体験のクラス内発表の授業が展開された。研究協議は、分科会ごとに、冒頭の生徒インタビュー、授業者からの授業解説、授業者と参観者による意見交換の順に行った。

【研究協議、全体会における教職員の主な発言内容】

- 発表資料の構成がよかった。
- 発表資料に統一感があつた。学年で授業についての打合せをしっかりとやっている印象を持った。
- タブレットなどのICTをうまく活用していた。情報で学んだスキルがいかせていた。
- 同じ「保育」をテーマにしているのに、グループによって、発表方法や内容が異なり面白かつた。
- 聞き知ったことだけを書いている生徒もいた。一方で、5歳と15歳の違いなどを探究テーマにして、自分事として捉えているグループもあつた。
- 日常的に遭遇している課題を意識して、表に出せるような生徒にしたい。
- 探究の過程に必要な資質・能力は、様々な教科で扱わないと時間が足りない。
- 伝え方に課題がある。例えば、クイズ形式にするなど、伝え方の工夫があるとよい。
- 今年度は、探究の練習のため、グループで活動しているが、今後、個人でできるように更に指導が必要。
- 自分たちで調べたことを保育園でやらせてもらえなかつた生徒もいた。
- 質問や意見ができる生徒に育てたい。

先述したようにクラスによって授業の進度が異なるため、生徒の様々な学習活動を観察することができた。また、廊下に発表を終えたグループのポスターが掲示され、学年全体の様子を把握できるようになっていた。こうした工夫により、公開研究授業に参加した教職員から、様々な成果や課題、今後の展望が語られ、授業担当者の振り返りや「総合的な探究の時間」について学校全体で共有する機会になった。

5 考察

(1) 成果

ア 【視点①】 探究のプロセスに関する取組

探究的学習発表会では、発表者が他校の生徒や教職員等から質問を受けることで、自らの探究活動の価値を再確認する場面が見られた。他者から質問を受ける機会を設けることは、生徒の探究活動の充実につながるものと考えられる。また、他者の発表や質問を聞くことも生徒に新たな気付きを促すと考える。

探究活動の計画段階、中間発表やまとめの発表の場面を公開研究授業として設定すること、探究的学習発表会を積極的に活用することなどにより、学校内外の教職員等の大人や上級生からの質問を受ける機会を設けることも探究活動の充実にも有効であろう。

イ 【視点②】 校内体制づくりに関する取組

舞岡高等学校の生徒用テキストは、教職員が「総合的な探究の時間」で押さえるべきポイントや、授業に

おける具体的な手立てについて理解するツールとなるとともに、学校全体で「総合的な探究の時間」について共通理解を図ることもできる。さらに、生徒用テキストを第2学年用、第3学年用と作成していくことで、生徒や教職員が3年間の見通しを持ったり、各教科・科目とのつながりを考えたりすることも可能となる。

藤沢西高等学校の校内研修会、検証授業、教科会、公開研究授業という流れの一連の取組は、「総合的な探究の時間」に関する教職員の理解に資するものであり、長期研究員の研究結果からも「総合的な探究の時間」を充実させるための校内体制づくりに有効であると考えられる。このような取組を各校の実態に応じて継続的に行っていくことが大切であろう。

外部との連携においては、舞岡高等学校、藤沢西高等学校とも、外部講師を活用し、生徒一人ひとりの興味・関心に応じた探究活動の実現を図っている。中でも舞岡高等学校は、地域の素材や地域の学習環境を積極的に活用するという、「総合的な探究の時間」に期待される取組を行っており、他校の参考になると考える。

(2) カリキュラム・マネジメントの充実につなげるために

「総合的な探究の時間」を教育課程の中核に据えて学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントを行うためには、まず、「総合的な探究の時間」の意義、目標や内容について学校全体で共通理解を図る必要がある。次に、1年間の「総合的な探究の時間」の実践から明らかになってきた、育成を目指す資質・能力の具体や課題を把握し、一人ひとりの教職員が各教科・科目の時間に、具体的に何をやるかイメージを持ち、実践することが大切である。

そのために各学校においては、生徒用テキストの作成や校内研修会等、協力校の取組などを参考にして校内体制づくりに関する取組を充実させることが望まれる。

(3) 課題

本年度、探究のプロセスに関する取組、校内体制づくりに関する取組、カリキュラム・マネジメントに関する取組の現状を調査するため、協力校の教職員を対象として次の趣旨のアンケート調査を実施した。

- 各探究の過程についての指導上の工夫と今後の改善に関すること
- 質の高い探究を目指すために必要な手立てに関すること
- 学校全体での「総合的な探究の時間」の目標や年間指導計画の共有に関すること
- 「総合的な探究の時間」の目標実現のための自分自身の授業イメージに関すること
- 学校全体での「総合的な探究の時間」の成果、課題や解決方法等の共有に関すること 等

また、生徒の発表や質疑応答の様子、協力校の公開研究授業の研究協議における教職員の発言や研究担当者等への聞き取りから二つの課題が浮かび上がった。

- | |
|----------------------------|
| ①他者の発表に対して、なかなか質問することができない |
| ②説明の場面で、十分に根拠を提示することができない |

これらの課題とアンケート調査の結果を踏まえ、次年度は解決の方法を探る予定である。

研究のまとめ

1 研究の成果

本年度は、協力校の「総合的な探究の時間」に関する取組を調査、分析し、探究のプロセスに関する取組及び校内体制づくりに関する取組についての取組を整理し、成果と課題を示した。このことは、今後の「総合的な探究の時間」の充実に向けた取組の一助となると考える。

2 今後の方向性

協力校における探究のプロセスに関する取組、校内体制づくりに関する取組は、一定の成果をあげている。一方で、カリキュラム・マネジメントに関する取組は十分ではない部分もある。それを充実させるためには、「総合的な探究の時間」で育成を目指す資質・能力の具体を全教職員で共有するとともに、各教科・科目で関連を意識した授業をすることが欠かせない。

そこで、令和2年度は、本年度行ったアンケート調査の結果を分析し、探究のプロセスに関する取組、校内体制づくりに関する取組の更なる充実に向けた方策を探るとともに、それらカリキュラム・マネジメントにつなげる方策について研究を進めていく。

おわりに

最後に、本研究を進めるに当たり、御協力頂いた協力校の皆様や御指導、御助言を頂いた国立教育政策研究所 研究開発部 渋谷一典 教育課程調査官に心より感謝申し上げます。

[調査研究協力校]

県立舞岡高等学校

県立藤沢西高等学校

[助言者]

国立教育政策研究所 教育課程研究センター

研究開発部 教育課程調査官 渋谷 一典

引用文献

中央教育審議会 1996 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701h.htm (2020年3月1日取得)
中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」 p. 236
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2020年3月1日取得)
文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説総合的な探究の時間編』 学校図書
近藤誠 2020 「総合的な探究の時間と教科・科目の接続—探究の見方・考え方を働かせる視点を取り入れた授業づくりを通して—」 神奈川県立総合教育センター令和元年度長期研究員研究報告 第18集 p. 53

参考文献

神奈川県教育委員会 2019 『県立高校改革実施計画Ⅱ期(2020年度～2023年度)』
中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf (2020年3月1日取得)